

書評

篠崎茂穂

Goode, W. G., World Revolution
and Family Patterns

一九六三年発行で、四三二頁の本である。著者は先ず *Conjugal Family* を家族の理想的な型とする。この家族は直観と観察とからの理論的構造のものであるが、現実には血縁者が家庭生活に参与することを最小限度とするものである。この制度は現在の都市化と産業とを続けている社会が要求する人格尊重、自由、平等と、その人の行績とを中心とする社会機構に最も適応する家族型であると云う。而も社会の都市化と産業化の中では満たし得ない愛情は、家庭で満たされる事になる。

著者はこの様な家族の革命的変動を明らかにするため、先ず第二章に、西洋の家族的変動から分析を始める。この分析には、求婚、求婚と経済、結婚前の性関係、血縁結婚、結婚年令、平等と家庭、拡大された血縁関係の崩壊及び離婚等の項目を取り上げ、その中に家族の革命的変動を示そうとする。

大体以上の様な諸項目の分析を、第三章アラブ・イスラムの変動している家族型、第四章サハラ以南のアフリカ、第五章印度に於ける変動している家族型、第六章中国、第七章日本の各章の中に試み、家

族を中心とした変動が如何に革命的なものであるかを示す。併し、日本を除きどの民族も種々複雑な言語、慣習がある上に、統計的資料は少なく、加えるに正確を欠いているので、実証上多くの困難があるのはやむを得ない事としている。特にアフリカの場合の事を、著者は次のように書いてゐる。「サハラ以南の広大な地域と文化、その歴史的特殊性及び急激な社会的変遷等のために、家族の型の概略を記載する事にすら、非常に正確なものたらざるを得ない」(一六四頁)。だが「我々は、例えばアフリカの社会は多くの共通な特色を持っている事を期待し得る。それは中央アフリカを通して形成している母系帯と呼ばれているものである」(一六五頁)。「この母系家族社会に、父の地位が益々強く認められる傾向になつてゐる」(一九五頁)。「更に今後歐洲人の理念や社会経済の進歩の過程を辿って行くだろう」と書いてゐる(二〇二頁)。

各国はその歴史と地域に於いて、色々な差異があるが、併し全体的に云える事は、凡て都市化と産業化とにむかい、家族は夫婦愛中心の家庭へと変化している。最近まで強力であつた血縁関係による社会的機能は、社会の産業化によつて変わつていつてはいるが、その重要性が全くななくなつてゐるのではない。併し都市より田舎の家族の方が、変化をより多く受けてゐる。

アラブ・イスラムの諸民族の中で、特に教育ある者の間に於いては「現代の諸変化に伴い、青年男子は段々独立の家庭を持ち、各自自分の嫁の選択を希望して来ている」(一九九頁)。

印度に於いて結婚相手の選択は、大体に於いてまだ自由ではない。併しキャストや血縁間の結婚は、その数や制限は少なくなりつつある。産業化や都市化は大した程度ではないが、併し本質的に欧米式イデオロギーに向つてゐる。併しその変化は現在大したものではない。

中国はどうかと云うに、昔は家族中心であつたが、次第に各自相手を選ぶことになつて来ている。特に専門職や教育ある者の場合には、更にある程度産業労働者の間に於いても。今日、共産主義の下では、法律が恋愛結婚を認め、金銭や贈与の強制を禁じてゐる(二二九頁)。更に多妻や内妻を禁じてゐる(二八三頁)。中国は大家族制度で知られ、その一門一党は野村に於いて特に重要な存在であつた。共産国になつて国家が門閥の政治や経済の力を許さなくなり、地方自治組織がそれに代わる事となつた。これがために家族が破壊される結果となるのではなく、何処までも家族は中国社会の基礎的単位となつていて、今後 *conjugal family* の目的を達するには時を要するかも知れないが、決して後退の現象は起こさないであらう(三三〇頁)。

日本に関する記事は、二、三の記事を除けば、良く記叙されてゐる。例えば、青年男女の交際は、性関係に到る事も認められてゐるとか、子供の躰に關し、特に女子の場合罰する事は決してなさないと云う事、或いは又再婚の増加を特に取り上げてゐる点等は正確さを欠いてゐる。

著者は結論の中で、家族の変動は各民族や部族の中でその程度や関連項目に異なる所のあるのは勿論